九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

まなざしを捉える : ノスタルジア・ツーリズムの人類学から

徳安, 祐子
九州大学人間環境学府

https://doi.org/10.15017/2338942

出版情報：九州人類学会報. 29, pp.74-93, 2002-07-06. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

まなざしを捉える
—ノスタルジア・ツーリズムの人類学から—

徳安　祐子
（九州大学大学院人間環境学府）

Ⅰ．人類学における観光研究

現在、観光に関する人類学的研究は人類学の一領域として認知され、年々その研究も盛んになっている。はじめて人類学者が組織的に観光というテーマに取り組んだのは、1974年にメキシコシティで開かれたアメリカ人類学会のシンポジウムにおいてである。1977年にはその成果が *Hosts and Gusts : the Anthropology of Tourism*（邦訳題『観光・リゾート開発の人類学』（スミス編 1991））として出版され、観光人類学が成立する契機となった。しかしその後、長い間観光は社会科学のテーマとして市民権を得るには至らなかったようである。1990年になってイギリスの社会学者アーリが観光に関する著作 *The Tourist Gaze : Leisure and Travel in Contemporary Societies*（邦訳題『観光のまなざし』(1995)）を出版したが、そこでは「観光や行楽や旅行というのは、ほとんどの評論家たちが考えてきた以上に重要な社会現象なのである」とことわる必要を感じ、とくに社会学者にとって観光は「一冊の本を書くにしては、一見すると、こんな下らない主題はないようにみえる」ものであったようだ(ibid.:3)。また、人類学者にとっても観光は真剣に取り組むテーマとして抵抗があった。人類学者と観光客とは縁遠かったわけではなく、むしろ頻繁に出かけるフィールドワークの際には多かれ少なかれ観光客との接触が不可避なものであった。しかし、「伝統文化」を求めて海外まで調査に出かける多くの人類学者にとって「観光客は目障りな存在でしかなかった。それゆえ調査地も観光客がこない村を選んだし、写真をとる時もカメラのファインダーから観光客を注意深く除いた」（山下 1996a:7）のであった。また「多くの人類学者がツーリストと間違われることを嫌い、観光現象を扱うことを避けてきた」（橋本 2001:49）という面もあったようである。人類学者が自嘲を込めてプロフェッショナル・ツーリストと自ら称するということはよく知られている。人類学者は、フィールドワークで出会う観光客を見落としてきたのではなく、あえて目を向けないようにしてきたのである。

しかし今日、観光はグローバルとローカルの出会う場としてきわめて動態的な文化の有り様を示している。そこに生きる人々に光を当てることは、グローバルが世界を覆おうとし、文化は移動し、グローバルとローカルのせめぎあう現代に生きるわれわ

れにとって重要であろう。

Ⅱ-1. 研究対象としての観光現象

現在の観光現象は非常に多様である。「観光はその本来持つ性格によって常に自らの境界を広げ、曖昧にしてきた」ためであり、「研究よりも現実の方がはるかに先を行っている」（橋本 2001:52）。スミス（1991[1977]:1）は、観光客を「非日常を体験することを目的として、自宅からはるか離れた土地を訪れる、一時的な有閑者」と定義し、観光活動を「余暇時間＋可処分所得＋地域に根づいた道徳観」から成り立っているとしている。19 世紀後半、大衆消費社会の到来によってこれらの条件が揃うと、観光活動が大衆化し、イギリス労働者階級からマス・ツーリズムが興った。

マス・ツーリズムは目覚しい発展をみせたが、1970 年代頃からホスト社会に対する弊害が認識され、新たな観光形態や観光開発が少しずつ実践されるようになった。後にオールタナティヴ・ツーリズムと呼ばれるものであり、1980 年代に入ると活発に議論されるようになった。しかしオールタナティヴ・ツーリズムには「新しい観光」あるいは「もう一つの観光」というような意味しかなく、研究者などの間でも同意が得られていたのはマス・ツーリズムに対する批判という点のみであった。橋本が指摘するように「実体のない概念」（橋本 2001:53）であり、この言葉のもとに想定される観光形態は人によりまちまちである。オールタナティヴ・ツーリズムは現在のところ理念として存在しているといっていいだろう。しかし、観光産業はこの反マス・ツーリズム思想を次々と形にし、商品として取り入れていったのである。観光の形態は多様化し、1980 年代の終わりにはその傾向が顕著になった。時期を同じくして現れた、目的別に細かく揃えられたさまざまなガイドブックにはその傾向が表われている。

観光産業がこのように多様化してきた現在、観光の有り方は非常に複雑になっている。その上これまでは、観光を研究対象として措定する場合、できるだけ広い範囲の事象を取り込むためにゆるやかな領域設定がなされてきた（橋本 1999:9）。日本における観光人類学にその初期から取り組んできた橋本和也は、自身の経験から、観光研究を生産的に進めるために研究対象としての観光を戦略的に定義づけことの必要性を強調したのである（ibid.:9）。橋本は観光を「（観光者にとっての）異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」（橋本 2001:52）と定義した。

Ⅱ-2. 観光のシステム

スミスの編集した『観光・リゾート開発の人類学』(1991[1977]) は、人類学にとっての観光研究の重要性を示しただけでなく、観光地におけるホストーゲスト関係という視点を観光研究に導入した。現在でも人類学において観光現象を考える際、観光対象地域における観光行動の主体としてのゲスト、および観光対象地域において生活する主体としてのホストという関係は重要である。しかし、それだけでは観光現象を捉えるのには不充分であろう。ホストーゲストの背後にはそれぞれの属する社会・地域があり、その両者間には相互に移動が起きていると考えられる。ゲストはその送出社会からホスト社会へと移動し、ホスト社会からゲスト送出社会へはゲストの観光行動を促す情報が移動している。観光が経済的行為である以上、観光対象は商品としての価値を持たねばならず、それによってゲストは消費を行なうのである。観光対象に商品としての価値を付与するために不可欠なのが情報である。観光が「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」(橋本 2001:52) であるということを考えれば、観光対象は「よく知られたもの」となることによってはじめて観光対象となるのであって、「よく知られる」ためにはメディアの果たす役割が大きいことがわかる。つまり観光を成立させるためにはホストとゲストをつなぐメディアが重要な要素となるのである。このようにホストーゲスト、ホスト社会ーゲスト送出社会の間には人と情報の往来のシステムが形成されていると考えられる。そしてその中間に位置するのがホストの情報を作り出し流通させるメディアや観光産業などであり、またゲストが観光体験を購入する際の仲介にあたる政府、自治体や観光産業などである。

ここでは、ゲストとホスト、そしてその両者をつなぐものという観光のシステムから観光現象を考えたい。まずは日本においてこれまでなされてきた観光に関する人類学的研究について概観した後に、ゲスト、ホストそれぞれにとっての観光、そして両者の間がどのようにつながれているのかということについて考察していく。

Ⅲ. 日本における観光の人類学的研究

日本国内での観光研究は、1980 年代末から石森秀三を中心したプロジェクトによって始められ、多様な視点からの観光研究が行なわれた。その後もこれらのプロジェクト参加者によってさまざまに観光研究の成果が発表された。石森自身も観光研究の必要性を訴え続け、1996 年に編集、出版した『観光の二〇世紀』などにおいて共同研究の成果を発表している。また同 1996 年、山下晋司編集による『観光人類学』が出版さ

れた。これは当時の観光研究を集約的に示しており、テキスト的役割が期待されている。山下はその後1999年に『バリ　観光人類学のレッスン』を出版しているが、これと同じ年、橋本和也も『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方—』を出版している。前年の1998年には江口信清によって『観光と権力』が出版された。また2001年の『民族学研究』には「観光の人類学—再考と展望—」と題して観光人類学の特集が組まれ、橋本和也、川森博司、曽士才、江口信清の四名が寄稿している。

このように、日本の観光人類学は着実に進展しているが、日本国内における観光の事例研究となるとその数は多くない。国内をフィールドとする隣接学問として民俗学がすぐに思い浮かぶが、民俗学においても伝統概念に疑問が投げかけられて以来の新しい試みの成果として、観光を含めて民俗文化の動態的な面に注目した研究が散見される。このように学問的領域を越えて、観光人類学と関心を共有できる研究が展開されている。

国内観光の人類学的研究の先鞭は、欧米の人類学者によってつけられた。ケリー（Kelly 1986）はノスタルジア・ブームの圧力のもとでその流れに抵抗してきた山形県庄内平野の人々について、アイヴィー（Ivy 1995）は岩手県遠野において柳田国男の『遠野物語』に基づく「ふるさとイメージ」を利用しながら展開された国家レベルのプロジェクトとそれに対する地元行政の対応について、またマーティネス(Martinez 1990）は外部から与えられたイメージを利用して操作するという観光対象の人々の反応や態度について、志摩半島の海女をめぐる観光のフィールドワークをもとに論じている。そして、日本語によって現代社会における観光現象の重要性を説得的に論じたのが太田である。太田は1992年に「沖縄・八重山の『ウミンチュ体験コース』考」を発表し、本土－沖縄、農民－漁民という対比の中で常に社会的劣位に置かれていた沖縄漁民たち「ウミンチュ」が観光という場面でおこなう「抵抗の実践」について報告している。また翌1993年に発表した「文化の客体化——観光をとおした文化とアイデンティティの創造」ではウミンチュの事例のほかに、岩手県遠野における民話観光、および北海道二風谷のアイヌ観光についての事例を取り上げている。「文化の客体化」[1]という概念を中心に、「自己成型は個人の責任で行わなければならない、という厳しい社会状況」（太田 1998:92）において、観光が地域の人々のアイデンティティ構築の場となるとして位置付けている。

これ以降の日本における観光研究は、太田の客体化論によって方向付けられて展開してきているといってよいであろう。山下によって編集された『観光人類学』（1996）には、日本をフィールドにした論考として川森および橋本裕之によるものが収められ

[1] 文化の客体化とは「文化を操作できる対象として新たにつくりあげること」（太田 1998）。

ている。川森（1996a）は岩手県遠野をフィールドに、「より大きなシステムに属しながら、自身にとって意味ある生活を組織していくための抵抗の拠点をどのように設定していくか」（ibid.:157-158）という問いを立てた。昔話の語り手の実践を中心に考察し、柳田の『遠野物語』や「ふるさと」という支配的イメージに対して親から伝承された方言による語りを抵抗の拠点として位置付けている。そして「遠野においては、ノスタルジックなイメージによって開かれた観光という回路が、一方で自分の根につながりながらノスタルジアに抵抗して、現代社会のなかで自分の人生に新たな意味づけをしていく道筋ともなっている」（ibid.:157）と述べた。一方の橋本裕之（1996）は伝統芸能の「壬生の花田植」について、演じ手の感覚ということを中心に論じている。「当事者は保存と観光という２つのコンテクストにたいして、２つの方法を使い分ける戦略を編み出」（ibid.:186）すことによって、観光の場での演じる快感、見られる快感に由来する「のぼせる」「弾む」といった感覚を維持している。そして彼らは「保存と観光のはざまで試行錯誤しながらも、依然として自己の存在理由を獲得するべく『壬生の花田植』を解釈／再解釈しようとしている」（ibid.:187）と論じた。

川森、橋本両者ともに太田の客体化論を援用し、観光の場における実践がアイデンティティ獲得につながっていることを示したのである。以後、川森は継続して遠野をフィールドに観光に関する論考を発表しているほか[2]、日本における事例研究は伝統的な文化を求めるノスタルジア・ツーリズムを中心に、人類学や民俗学においてなされている[3]。

Ⅳ-1. ゲストにとっての観光—それは神聖で真正なものなのか—

観光という場面において、ゲストが経験することとは何だろうか。ゲストは何を求めて旅へ出、何を得て帰るのであろうか。観光人類学において、ゲストにとっての観光行動はしばしば儀礼と関連付けられて語られてきた。

近代的な観光現象について、1960年代初頭にはブーアスティンによって議論がなされている。ブーアスティン（1964[1962]）は、近代になって大量に出現したアメリカ人観光客について論じ、その旅行経験はあらかじめ作り上げられた稀薄なものになったと述べた。彼らは現実世界のものよりもイメージ通りの「擬似イベント（事象）」に満足するという（ibid.:91-92）。しかしブーアスティンの議論は旅行者と観光客を区別し、差異化するものであり、エリート主義だとしてマッカネルによって厳しく批判

2 川森（1996b, 1999, 2001）。
3 森田（1997）、八木（1998）、足立（2000）など。

された。マッカネル（MacCannell 1976）は、観光が聖なるものを求める現代の儀礼であり現代人にとって真正性を求める巡礼であるとした。観光を真正性の追求として捉えるマッカネルの議論以降、観光人類学において真正性をめぐる議論はひとつの争点となってきた。マッカネルは、観光客が他者のリアルな生活に魅力を感じてその裏側を覗こうとする、そのまなざしに対して観光客に提示するための「演出された本物」が創り出されるのだとしている（ibid.:91-107）。したがって、ブーアスティンのいう「擬似イベント」的な現象は観光客個人の求めるものではなく、観光客個人はあくまでも真正性を求めているというのである。

グレーバーン（1991）は、マッカネル同様、観光を「聖なる旅」とし、そのなかで真正性が追求されると述べた。観光が現代において儀礼と同様の役割を果たしていると位置付けたのである。労働と観光とを日常と非日常という対比で捉え、さらにそれを日常から非日常、俗から聖への移行をともなう儀礼の構造になぞらえている。観光活動を「心を高揚させ、自己の気分一新と本質的な自己満足をおこなうものであるという意味において、聖なるもの」（ibid.:37）であるとしている。聖なる時間／観光活動は、もう一つの生活であり、「『ほんとうの生活（real life）』という以上に『真なるもの（real）』を示している」（ibid.:34）と述べた。

しかし橋本和也（1999）は、グレーバーンの議論において、観光が「聖なる旅」とされた過程をたどり、「本来別々の文脈に属し、両者の間に類似性が発見されるというだけの、隠喩の関係にある『観光』と『巡礼』を、同じ文脈に属するものとして扱うという過ち」（ibid.:75）を指摘した。観光は、巡礼から「神聖さ」という要素を削除したときに成立すると論じ、これは観光と巡礼との本質的な違いであり、このことが観光そのものを本質的に特徴付けるとしている（ibid.:85）。そして真正性については、観光者は「よく知られたもの」を求めているだけであって、真正性を求めているのではないと述べている（ibid.:150）。橋本はその根拠として1993年にバリ島で建造計画が発表された世界で最も大きな彫刻「ガルーダ・ヴィシュヌ・クンチャナ」をめぐって起きたバリ知識人と学生・活動家との間の対立の事例をあげている（ibid.:144-150）。両者は共にゲストに真正なものを提供すべきと考えたが、真正性を巡っては見解に相違が生じていたというのである。すなわち新たな創造物でも真正といえるか、伝統的生活や歴史的記念物のみが真正なのかという点である。しかしこれが完成すれば多くのゲストが訪れるだろうということから橋本は「『真正』な文化を求めるのは、地元の『文化』にアイデンティティの拠り所を求める人々であり、またその『文化』を研究対象としている研究者たちだけ」（ibid.:150）であると論じている。しかし、ゲストが真正性を求めるかどうかという問題と、ゲストの体験や観光対象となるものが真正であるかどうかという問題は別にして考えられるべきであろうし、バリという一フィ

ールドの事例からゲストが真正性を求めないと結論するのは性急ではないだろうか。

議論の出発点となったブーアスティンについて、吉見（1996:25）は「『旅行＝本物／観光＝偽物』という区別は、それ自体、多くの観光客が共有する『本物』への指向と同型的」であると指摘した。つまり、エリート主義と批判された旅行者と観光客とを区別する考え方は、多くの観光客が「お仕着せのうわべだけの経験に満足する『単なる観光客』とは自分は異なるのだと考え、彼らなりに『本物』に近づこうとしている」のと同じように、ブーアスティンの持つ「本物」に対するこだわりの表われであるという。

ハンドラーとリネキン（1996[1984]）が伝統を解釈のプロセスと論じたように、「真正な文化」は実体として存在するものではない。それは解釈の結果であり、過去に向けた想像である。太田（1998:72）が指摘するように「文化や伝統はある価値体系によって解釈された結果、初めて『真正さ』を獲得する」のである。したがって、ゲストが観光対象とするものやその経験が真正であるか否かという議論は、有効性を持たない。しかしそのこととは別に、ゲストやホストにとっての観光を考える時、「真正性」についての視点は依然重要であるといえるだろう。

Ⅳ-2. ノスタルジア・ツーリズムへ

日本の国内観光についての事例研究においては、ゲストを観光に向かわせるものについてどのように論じられてきたのであろうか。日本における国内観光についての研究は、ノスタルジア・ツーリズムを中心になされてきた。その先駆的な仕事をしたケリー（Kelly 1986:606）はノスタルジア・ツーリズムが生起する社会的状況について述べている。1960年代後半、田舎は高貴な美徳の最後の保管場所であり、その慣習は真正な伝統の末裔とされた。田舎が中央や近代的都市の道徳的補完物とされ、メディアを通じてフェティシズムの対象となっていったのである。また、遠野市は『遠野物語』イメージ、あるいは「ふるさとイメージ」を利用して地域活性化を行なったが、太田（1998:77-78）は、民俗学的世界が高度成長期後の日本において観光資源として成立する社会的要請として、1970年代の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンから考察している。「ふるさと」として語られる日本の周縁地域の牧歌的生活は、都市生活者の日常性のなかに発生する虚無感を癒す場とされ、都市生活者のノスタルジアに訴える。「ふるさと」は都市生活者の日本人としての自己アイデンティティを再認識させてくれる場として語られると論じた。

日本国内においてノスタルジア・ツーリズムへと人々を誘うのは、真正な伝統に対する欲求であり、「ふるさと」である。都市生活者が失ったものが残されており、都市

で感じられるアイデンティティの不完全さが癒されるはずの「ふるさと」である[4]。

V-1. 観光されるということ
—文化は切り売りされるのか、つくりあげられるのか—

観光を、ゲストが真正性を求める行為としたマッカネル（MacCannell 1973）は、それに対してホストが「演出された本物」を提供することになると述べた。そしてそれは、観光における文化の商品化の過程で表われる問題である。

文化の商品化ということについては、観光人類学初期には大変ネガティブなイメージで文化にあたえるインパクトが論じられていた。その最も典型的な例はスミスが編集した『観光・リゾート開発の人類学』（1991[1977]）に収録されているグリーンウッド（1991[1977]）の論文である[5]。彼はスペインバスク地方の祭りアラーデについての調査を通じ、怒りと懸念をもって観光が現地社会に対して持つインパクトについて告発している。文化は観光において商品化され、切り売りされ、それによって文化本来の意味を喪失している、というのである。そこでは文化を搾取され、外部から与えられた力によって文化が変容していくホスト社会の姿が描かれている[6]。

ここには、「純粋な文化」「真正な文化」という考え方がある。これは「長い間、人類学理論の大前提として機能してきた概念の一つ」（太田 1998:63）である。太田（1998:64）はクリフォードにならい、「『純粋な文化』が過去に存在し、現在それらが外部からの影響により失われつつあるという語り口」を「エントロピック（entropic）な語り口」とよび、次のように続ける。「だが、他方では、同じような変化を、外部の文化要素を貪欲に取り込み新しい文化が発生している状況として語ることも可能なはずだ」。そしてこれを同じくクリフォードにならって「発生の語り口（narrative of emergence）」と呼んだ。「エントロピックな語り口」に表わされるような文化の捉え方はあまりにも本質主義的、静態的な文化観というばかりでなく、「その人たちの行なう文化の生産・創造を『非真正な（inauthentic）』行為としてネガティヴに評価する結果を生」み、「対象社会の人々の主体性を否定する」（太田 1998:91）。太田はこの「文化の語りの政治性」を問題にする。「観光が内包している力関係の隙間を利用し、『ホス

---

4 ノスタルジア・ツーリズム（ふるさと観光）については坪井（1986）、安井（1997）、川森（2001）などを参照。

5 1989年に出版された第2版のエピローグでは、文化変容に関する他の要因、真正や伝統の概念に対する再考、そして「観光にたいする創造的反応」に言及しており、視点の転換が図られている（グリーンウッド 1991:250-256）。

6 観光客が「文化商品化」による状況の変化を感じる場合でも、当事者たちは驚くほど連続性を認識しているという事例も報告されている（Cohen 1988）。

ト』側の人々が、肯定的な自己アイデンティティを形成しながら、その関係を中和しようと努力している状況をも、観光批判の名のもとに研究の視野の外へと追放してしまうことになるだろう」(ibid.:91) と述べ、「エントロピックな語り口」による観光研究に対して警鐘を鳴らしている。

この太田の議論は、その後の日本の観光の人類学的研究に多大な影響を与えている。当時の観光研究を集約的に示す形で編集された『観光人類学』(1996) において編者の山下晋司が次のように述べている。「私たちが見るべきことは、現代において『伝統文化』が消滅していくという物語ではない。そうではなくて、文化が境界を越えて享受され、古い伝統が新しい時代に適応し、そこに新しい文化が生成してくるという事実である。アメリカの文化批評家ジェームズ・クリフォードの言葉を借りて、これを『消滅の語り』に対する『生成の語り』と呼ぶことにするが、これこそ本書における≪文化≫の語り方である」(山下 1996a:11) [7]。

V-2. ノスタルジア・ツーリズムにおける文化の客体化と創造

上述の議論の過程において、太田 (1998) は岩手県の遠野民話観光、北海道の二風谷アイヌ観光、沖縄県のウミンチュ観光の事例をとりあげ、観光を通じて文化を客体化することによって、自己の主体性を回復し、アイデンティティを形成する可能性が開けることを指摘している。

さらにアイヴィーや太田と同じ遠野をフィールドに議論を展開しているのが川森 (1996a, 1996b, 1999, 2001) である。遠野ではディスカバー・ジャパンのキャンペーン以来『遠野物語』によって喚起される民俗文化に満ちたイメージによって観光客が多く訪れるようになった。観光産業が盛んになるにつれて遠野は『遠野物語』のイメージに沿った町づくりを行なってきた。そのなかに「とおの昔話村」がある。隣接した物産館には「語り部ホール」があり、民家を模したステージから客席の観光客に対する昔話の公演が行われている。そういった場を主な活動の場としている話者に対する聞き取りを中心に調査を行なった川森 (1996a, 1996b) は、太田が示した分析枠組みを援用しながら論を展開している。『遠野物語』のイメージや「ふるさとイメージ」は、遠野にとって外部から与えられた支配的イメージであり、ともすれば遠野市という個別の空間を消し去り、一般的イメージへと還元してしまう危険性をはらんでいる。遠野の語り手によって観光客に語られる昔話は、これらのイメージを利用していなが

[7] クリフォードの議論に関して太田と山下の間には解釈の相違が見られる。詳しくは太田 (1998:218-226)、山下 (1998)。

ら、父親から伝承された方言を駆使して語ることで、同時にイメージに対する抵抗の拠点となっていると川森は述べる。「より大きなシステムに属しながら、自身にとって意味ある生活を組織していくための抵抗の拠点をどのように設定していくか」（川森1996a:157-158）ということが川森の中心的な問いであり、遠野では「外部から与えられた有力なイメージを受けとめて、それを自分が前の世代から受け継いだ生活基盤につながる形のものにつくり変え、自分が操作できる空間を広げていく」（川森1996b:174）ことにより実践されている。ここでは自分が主体的に判断できるということが重要であり、その拠点を確立していく過程を学習の過程[8]、太田の言うところの文化の客体化のプロセスとして重要視している。

これら遠野の民話観光の事例は、観光の場がホストの主体を回復し、アイデンティティを確立する場になりうるということを示している。

Ⅵ-1. 観光のイメージ

ここまで見てきたように、ノスタルジア・ツーリズムにおいては、ゲストは真正性を求めてホスト社会へと出かけて行き、それを迎えるホストにとっては自文化の客体化によって主体を回復する機会となることがわかった。次にその両者の間がどのようにつながれているのかということに注目しながら、ゲストが求める「真正性」、近づこうとする「本物」について考えてみたい。

ブーアスティン（1964[1962]）は、複製技術革命以来の大量生産されるイメージが、われわれの想像力や真実らしさの概念に及ぼした革命的な影響について論じた。特にマスメディアによって製造される「事実」のことを「擬似イベント」と呼んだ。ブーアスティンは現代観光を「本当の」経験から「偽物の」経験への堕落と捉えているが、ベンヤミン（1999[1936]）が指摘したように、今日本物とコピー、本物とまがいものとの区別はなくなりつつある。

また吉見（1996）は、ブーアスティンの堕落した観光体験という考え方に対して、そのような変容を近代における身体感覚や現実感覚の変化の問題として考えるべきであると主張している。シベルブシュを引用しながら、鉄道に乗って旅行するようになった旅行者は「遠いものと近いもの、見る者と見られる者を同時に内包していた風景の磁場から抜け出すのであり、彼がいる場所と彼が見る風景の間には、『ほとんど実体なき境目』が入り込むことになる」（ibid.:27）と述べ、さらにはこのような風景の消失体験はすでに新しい現実となっており、消失した前景は、パノラマ的にものを見る

8 川森（1996b）により提出された概念。太田の「文化の客体化」のプロセスに対応する。

目には「もう存在しない」という。「疾走する速度のなかで風景は断片化され、記号化される」(ibid.:28) のである。

アーリ (1995[1990]) は、フーコーの「まなざし」概念を用いて観光について論じている。人は表象にまなざしを向けているのであって、その現実自体が直接体験されているものではない。そしてその表象は絵はがきやガイドブック、テレビ番組から取り入れた、その景色が観念化されたものである (ibid.:154)。したがって、ツーリストがまなざしを向ける対象は、記号として構成されたものである (ibid.:230)。

観光に出かける前に、ガイドブックやテレビやさまざまなメディアによって供給された情報によって、ゲストの中には観光対象がすでに観念として形成されているのである。目的地ではゲストを取りかこむ風景の断片から、ゲストのイメージに合ったものが選びだされ、写真におさめられて持ち帰られるのである。目的地で直接の体験を重視するゲストが例えばトレッキングに参加したとしても、まなざしを向けるのは「絵はがきのような風景」であり、また「テレビ番組に出てきそう」なロケーションに喜び、ビデオカメラをまわしながら架空の番組の再構成をも試みるのである。こうしてゲストは観光のなかで、事前に作り上げた目的地の表象を再生産するのである。そしてゲストの視線を意識して作られるガイドブック、テレビ番組などのメディアも同様にイメージの再生産をおこなうことになる。観光対象の表象はメディアによって大量に複製され実際の観光活動を作り出す。ブーアスティン (1964[1962]) が指摘するように、事実が擬似イベントに従属することになるのである。

Ⅵ-2. ゲストにとっての真正性

それでは、吉見がブーアスティンのエリート主義的な観光－旅行の差異化に対して述べたように、どの旅行者もそれぞれにもっているという「本物」に対するこだわりはここでどのように実現されるのか、あるいはされないのだろうか。観光とは本来の文脈から引き剥がされた不完全なものに対してまなざしを注ぐのであり、「本物」に対する欲求とは交わることがない。そして、「本物」を指向する観光者はつねに「そうでないもの」をめざすことになるのではないだろうか。しかしこれらももちろんメディアによって生産され、提供される新しいまなざしなのである。「ガイドブックにない…」「観光コースでない…」「地元の人が集まる…」などの文句はガイドブックなどに頻繁に見られる。そしてこれらのまなざしも再生産が繰り返され、さらに「そうでないもの」が求められる。やがてまたメディアは新たなまなざしを提供し、それを追って観光の多様性はまなざしとともにますます増殖していくのであろう。情報が観光を

形づくるのである[9]。

ゲストの求める真正性とは、このようにメディアによる情報が現実の観光を規定するなかで、メディアによって供給される情報に埋め込まれた記号である。そしてそれはゲストが自ら再構成する観光対象の観念にも折り込まれ、真正性を求めるゲストが観光対象の表象のなかにそれを読み取ろうとするのである。

観光産業やメディアから発信されたイメージはゲストの中で観念的な観光対象を形成する。ゲストはそれをともなって観光対象地を訪れる。ゲストはそこでイメージの再生産を行なうが、この時に仲介者として観光産業や行政機関が入り、その手助けをする場合もある。そしてゲスト社会には再び観光産業やメディア、そしてゲストによって再生産されたイメージが供給され、また新たなゲストの中に観念としての観光対象地がつくりだされるのである。ここには、観光を成立させる「イメージの循環」が見られる。そしてノスタルジア・ツーリズムにおいてはこの循環するイメージに真正性が付随するのである。

VI-3. メディアとしての観光

遠野市において『遠野物語』やそこから拡大した「ふるさとイメージ」が外部から遠野に対して押し付けられた時、遠野市ではそれを利用して地域おこしへと動いた。さまざまなイベントや文化施設にそのイメージを利用し、また『遠野物語』のモチーフを町中に出現させることとなった（川森 1996b, 1999)。このように外部のまなざしを意識した地域おこしは、この文脈でいうならば、いわばまなざしを投げかけられることを前提に、あらかじめ記号を散らばして埋め込んでおくことである。人々が自己の文化を客体化することで、主体的にこの作業を行なうことができる。自文化を客体化することで、ホスト社会の人々は好ましい自我像を地域に反映させ、まなざしを投げかける多くの他者に対して自己を表現することができるようになるのである。この場合、地域そのものがメディアとして機能しているといえよう[10]。

しかし、ホスト社会にとって観光と生活とは同じ空間で行われているのであり、生活空間であるということは地域をメディアとして活用するためにさまざまな制約がおこる。それに対して、生活と別の場所に文化をモデル化して展示する方法があり、「模型文化」と呼ばれている。模型文化では生活上の制約を受けることなく自由な表現を

---

9 宮崎公立大学人文学部国際関係学科の新井克弥研究室がタイの安宿街で若い日本人旅行者に対してアンケートを行なっている。個性を重要視しながら、ガイドブックを介した類似の観光行動が明らかにされている（「インサイド・カオサン」)。http://hompage.mac.com/khaosan/khaosan/k-frameset.html

10 ただし、ホスト社会における実践や指向性については自治体と地域住民とが一致しているとは限らないので、注意が必要である。

することができる。この文化の展示方法は、博物館や民族村等の施設において見られる[11]。

観光と生活を切り離すことは、観光がホスト社会に与えるストレスを回避する方法としても注目されている。他者のイメージをそのまま引き受け、その「イメージに合わせた行動をとり、観光者が期待する役割を果たすことは、観光者受け入れ社会のアイデンティティの危機」（橋本 1999:232）となるからである。橋本（1999, 2001）や川森（2001）は、「生活の次元から離れたところに、新たなジャンルとしての『観光文化』[12]を創造する」（橋本 1999:232）ことの必要性を強調している。観光文化はまた民族／民俗芸術を観光用に作り変える。造形は土産物として、芸能はショーとして観光客に提供される。ノスタルジア・ツーリズムについて考えるとき、とくに芸能は重要である。元来「見られる」「演じる」性質のものである上、しばしば地域の信仰と深く結びついているために、特にアイデンティティの危機が懸念されるものである。民俗学の分野で関心が強かったこともあり、観光や民俗芸能大会によって「ステージ化される」ようになった民俗芸能と伝統をめぐってはすでにいくつもの研究が見られる[13]。

Ⅵ-4. ホストにとっての真正性

このように文化が操作できるものとして練り上げられたり、創り出されたりすると、そこには自己表現できる空間が生まれる。客体化された文化要素には肯定的な自我像を反映させることができるからである。もちろん、観光を通じて出会うゲストに対して言語によって自己表現をする機会も多いであろう。観光というメディアを得たとき、ノスタルジア・ツーリズムにおいて多くのホストが自らの文化の真正性の主張をおこなう。ホストによって「本物」「伝統」「秘境」という真正性に連なる言葉が多様されるのである。

八木（2000）は1988年に開催された「ぎふ中部未来博」について、そのなかで上演された多くの芸能に焦点を当てて論じている。民謡や獅子舞、和太鼓など、県内99市町村全てから約420団体が参加したという。民俗芸能ばかりでなく、創作した芸能も数多く出演した。翌年『ふるさと奮戦記』が発行され、各市町村が開催当日を振り

11 このことについても注10と同じである。逆に政府や一部のエリートによってこれを利用され、彼らにとっての望ましい姿が表象されている事例も見られる。これらは文化の所有権の問題である。曽（2001）などが参考になる。

12 橋本（1999）によって、「観光者の文化的文脈と地元民の文化的文脈とが出会うところで、各々独自の領域を形成しているものが、本来の文脈から離れて、一時的な観光の楽しみのために、ほんの少しだけ売買される」ものと定義されている。

13 観光との関係に注目して論じているものに、足立（2000）、橋本（1996）、八木（1998）などがある。

返って各演目の紹介を行なっている。八木は、この『ふるさと奮戦記』が外部に向けたものであり、どのように理解されたいかという思いに記述が支配されていることを指摘し、その上で新旧入り混じった郷土芸能がどのように語られているか、ということに注目している。多くの民俗芸能は「伝統」の語りが与えられているが、新たに創作された芸能についても「伝統」を装う語りが多く見られる。創作されたものが「復活」をうたい、「伝統」を主張するケースも多いという。そして演者や行為者の指向性について、「長く伝承されてきたものが固有の歴史と真正性を誇示し、新たなものが伝統ある民俗や祭礼行事を理念型にみずからを成形する」(ibid.:143)。そしてその両者の間には中間的な諸形態がある。このような「『伝統への憧憬』がめざすものは、由緒正しい真正な民俗芸能という理想型に自己同一化をはかること」(ibid.:137) であるという。

これは中央－地方という関係のなかで地方の多くの地域にとって好ましい自我像が「伝統」という言葉に集約することを示している。ノスタルジア・ツーリズムのなかで循環する「真正」というイメージを捉え、好ましい自己のイメージとして同一化した結果であると考えられる。そして観光というメディアを通じてそれが表出し、「あらゆる自治体がこぞって『村落生活の伝統』というシンボルを演出しようとする」(ibid.:143) のではないだろうか。

Ⅶ. 栂尾神楽におけるイメージの循環

最後に、ゲストとホスト、その間で循環するイメージについて全体像を提示するために、筆者が調査をおこなった宮崎県東臼杵郡椎葉村栂尾地区の事例[14]をあげたい。椎葉村はいくつかの伝統芸能を保持する山村である。とくに神楽は盛んであり、現在26地区においておこなわれている。それらは椎葉神楽と総称される。栂尾地区における栂尾神楽もそのひとつである。

栂尾地区では、栂尾神楽が外部から「発見」され、外部との折衝を経て客体化されていく過程について調査をおこなった。神楽の舞い手たちによる神楽の客体化は、文化財[15]指定と前後して頻繁に訪れた民俗学者の調査を通してはじまったと考えられる。民俗学者は栂尾神楽の持つ「真正な伝統」を高く評価した[16]。神楽の当事者たちは調

14 椎葉村栂尾地区での神楽調査は、1998年、1999年の祭りにおいて九州大学文学部人間科学科比較宗教学研究室村祭り班による共同調査として実施した(飯島・徳安 2000)。筆者はこれにグループの一員として参加したほか、1999年度には約10ヶ月間個人での住み込み調査をおこなった。

15 1974年、栂尾神楽として村の無形文化財に指定され、その後は椎葉神楽として1980年に国の選択無形民俗文化財、1991年には重要無形民俗文化財に指定される。

16 民俗学者の椎葉神楽に対する評価としては「『板起し』『有長』など非常に珍しい伝承を含んだ」「地域

査されるなかで、栂尾神楽を表象する「伝統」という言葉を獲得し、研究者の「古きもの＝真正なるもの」という伝統の理念をも取り込んでいったのである。それに基づき、研究者と共同して神楽を固定、復古する試みがおこなわれた。そしてますます栂尾神楽は「真正な伝統」を体現し、学術的にも評価されるべきものになっていったのである。

一方、栂尾神楽がおこなわれる栂尾神社の祭りでは、より広域から集まる「新たな客」が出現、増加していたことがわかった。従来の観客が近隣地域から集まり、身体的に参加[17]していたのと対照的に、これらの観客は神楽を鑑賞するのである。「新たな客」は神楽の場において参加するのではなく、ほとんどがまなざしを投げかけるだけの存在である。この「新たな客」は栂尾神楽に現れた「ゲスト」であるといえるだろう。このようなゲストに対しておこなったアンケートからは、情報源としてマスメディアと研究者とが浮かびあがった。とくに遠方からのゲストを呼んだのは椎葉村を主題にしたドキュメンタリーのテレビ番組であった。地域住民や観客から名前のあがった番組は、いずれも椎葉村、椎葉神楽を秘境、秘境の芸能として実に上手く「再構成」したものであった。そこで作り上げられているのは「各地で滅びた『伝統』が秘境椎葉で現在までひっそりと受け継がれた」とするイメージであり、民俗学者の椎葉神楽に対する見方と同様のものである。

このような栂尾神楽のイメージが、研究者やメディアを通して情報として流通する。ゲストはこれらの情報から観念的な「栂尾神楽」を再構成し、そしてそれを求めて栂尾までやって来るのだ。実際に聞き取りの結果にもその志向性は表われている。また、伝統とは変わらないものだという理念から、ビデオ撮影をおこなったゲストが前回録画された舞いとの違いについて舞い手にクレームをつけることさえあるのだ。舞い手がこうした観客たちと共有しうるのは「伝統」として客体化した栂尾神楽に対する視点である。彼らと折衝する中で、舞い手たちのなかでも「伝統」が観念化され、あるいはそれが強化されていくのである。

そして栂尾神楽の舞い手たちも、ゲストに対して「伝統」を強調するようになる。そのもっとも有力な根拠として用いられるのが、栂尾神楽発見当初、民俗学者から与えられた伝統の真正性についての「学術的お墨付き」なのである。舞い手にとって操作可能性が高いのは外部でおこなわれる公演であり、最近では出演する公演の質を自ら選択しようという意思が表われてきている。多くの観客が注目するなかステージ上

的特色が顕著であること、唱教、神歌の中には他の神楽にはない独特のものがあり、近世以前の神楽の古態を良く残していること」（渡辺 1981-1993:1）、「自然の脱落はあっても、簡潔化の行われない、最も古風な形のもの」（本田 1982:13）であることだった。

17 栂尾神楽では「せり唄」「芝入れ」などによって、神楽の舞い手である祝子や舞所である御神屋の外からも身体的に参加できるようになっている。

で舞う神楽は、パフォーマンスとして観客に訴えようとするため、動作が大きくなるなどしやすい。しかし栂尾神楽にとって、これは「みせもの」として位置づけられ、変わらないはずの「真正なる伝統」を脅かし、栂尾神楽のアイデンティティを脅かすものである。一方で、椎葉村では村立の博物館が民俗学者を擁しており、彼を通して学術的な要素を持つ公演の依頼も多い。舞い手たちは「みせもの」的な公演をなるべく排除し、学術的な公演を志向することで、ますます強く栂尾神楽を「真正なる伝統」へと同一化させていく。それは外部に向けての自己の表象を選び取っていくことでもある。マスコミ関係者や研究者を含む観客に対して「伝統」を強調することや、外部での公演を学術的な場に限ろうとすることは、そこから発信され、流通する栂尾神楽のイメージを自ら操作することになる。これが栂尾の人々の外部に向けた自己表象の方法となるのである[18]。

Ⅷ. 被観光からの社会運動

観光という場は、ローカルとグローバルとの出会う場である。そこに現れる力の不均衡は、より大きな世界の人々が自らの文脈でローカルな世界を読み解こうとするところに発現する。しかし、太田（1998:74）がフーコーを引用して述べるように、力関係の網目にからめとられることは、新たな抵抗や創造の可能性が開けることでもある。観光の場はローカル世界の人々にとって抵抗や創造の場ともなりうるのであった。ノスタルジア・ツーリズムの事例からは、押し付けられる表象を、少しずつ自らに引きつけて操作することによって新たな自己表現の場とする人々の姿が浮かび上がってくる。観光される側の人々が、観光のなかで投げかけられるまなざしを捉え、そこから自己表象の言葉を引き出して自分のものとしてきたのである。そして観光というメディアを通してはじめて、より大きな世界に通用する言葉を発することができるのではないだろうか。その結果として「文化を語る権利」をめぐって社会的な運動に発展する例も見られる[19]。しかしそのような目に見える社会運動が起きていないホスト社会でも、自己の表象をめぐって多くの人々が争っているのである。メルッチ（1997[1989]）の唱える「新しい社会運動」のように、ゆるやかに連帯しながら、自己をとりまく世界との関係性をわずかずつでも変えていこうとしているのである。

---

18 栂尾地区では観光産業に携わる人がいないということ、そして民俗学者を擁する博物館が仲介者として存在することは、栂尾神楽が観光産業ではなく学術的な方向への偏りを促していると思われる。これは観光の場というには一般的でないかもしれないが、さらに考察を深めていくことで、川森（2001:80）の提起する「経済的な動機づけ以外のものを観光の場に見いだすことができるのか」という問題により深い回答を示すことのできる事例になりうるのではないだろうか。

19 葛野（1996b）など。

本稿では、これまでの観光研究の流れを、国内のノスタルジア・ツーリズム中心に概観しながら、観光というシステムの捉えなおしを図った。現在観光研究の多くは観光地における問題が中心となっているが、ゲストを送出する社会やメディア、それら相互の関係に関しても一層研究が進められる必要があるだろう。またこのシステムは、観光対象地が海外になったときにより重要であろう。とくに日本国内のノスタルジア・ツーリズムでは比較的問題になりにくい仲介者の問題、ゲスト送出社会とホスト社会の関係といった問題を浮かび上がらせる。また、現在ノスタルジア・ツーリズムはもっぱら国内観光が対象となっているが、日本人が「ふるさと」としてノスタルジックな視線をそそぐのは、すでに国内にとどまらない。葛野（1996a:127-128）はグレーバーン（1991[1977]）が示した観光についての類型を参照しながら現代の観光類型について論じているが、そのなかで民俗観光とエスニック・ツーリズムは同じ思想の上に成り立っていると指摘している。エスニック・ツーリズムのホスト社会も、「ふるさと」となり得るのではないだろうか。辺境が間断なく作られていくように、「ふるさと」は観光産業の仕掛けによって今後ますます肥大していくであろう。国内では「ホストとゲストの経済的力関係は相互転換の可能性を含み、ホストとゲストの関係が別の場面においては逆点する可能性を持つ」（森田 1997:59）。しかしそうではないエスニック・ツーリズムのホストたちは観光というメディアを操って社会運動へと転換していくための「体力」をどのようにつけていくことができるのであろうか。

また、前節からも明らかなように、観光のシステムと人類学者の実践とはかなりの部分が重なっている。人類学を問いなおす意味でも観光研究は重要であるといえるだろう。ノスタルジア・ツーリズムの対象を海外に広げて考えることやゲスト送出地域としての日本に目を向けることは、日本で人類学をすることの意味に近づくことになるかも知れない。そして、このようなシステムのなかに組み込まれているわれわれは、ホスト社会の「体力」作りにいかに関わることが可能なのか、真剣に考える必要があるのではないだろうか。そのためにも個々の場面で、グローバルが見えるような民族誌的研究の積み重ねが必要であろう。

参考文献

アーリ，J.　1995［1990］『観光のまなざし』加太宏邦訳、法政大学出版局。

足立重和　2000「伝統文化の説明―郡上おどりの保存をめぐって」『歴史的環境の社会学』（片桐新自編）pp. 132-154、新曜社。

飯島秀治・徳安祐子　2000「栂尾神楽―生成する儀礼」『椎葉の祭り』（関一敏・竹沢尚一郎編、

九州の祭り第2巻）九州大学人間科学科比較宗教学研究室。
石森秀三　1996『観光の二〇世紀』ドメス出版。
江口信清　1998『観光と権力』多賀出版。
――――　2001「クルーズ船観光の人類学に向けて―島国ドミニカとクルーズ船観光の関係を例に」『民族学研究』66(1)：106-119.
太田好信　1992「沖縄・八重山の『ウミンチュ体験コース』考」『中央公論』8月号、pp. 333-339
――――　1993「文化の客体化―観光を通した文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57(4)：383-339.
――――　1996「エコロジー意識の文化人類学―ベリーズのエコ・ツーリズムを中心に」『観光の二〇世紀』（石森秀三編）pp. 207-222.
――――　1998『トランスポジションの思想―文化人類学の再想像』世界思想社。
――――　1998[1993]「文化の客体化」『トランスポジションの思想―文化人類学の再想像』。
落合一泰　1996「≪南≫を求めて―情報資本主義と観光イメージ」『観光人類学』（山下晋司編）pp. 56-65、新曜社。
川森博司　1996a「ノスタルジアと伝統文化の再構成―遠野の民話観光」『観光人類学』（山下晋司編）pp. 150-158.
――――　1996b「ふるさとイメージをめぐる実践―岩手県遠野の事例から」『思想化される周辺世界』（清水昭俊他編、岩波講座文化人類学第12巻）pp. 155-185.
――――　1999「町が化ける―まちづくりのなかの民俗文化」『妖怪変化』（常光徹編）pp. 126-154、ちくま新書。
――――　2001「現代日本における観光と地域社会―ふるさと観光の担い手たち」『民族学研究』66(1)：68-84.
葛野浩昭　1996a「観光旅行の諸類型―擬似体験としての観光旅行」『観光人類学』（山下晋司編）pp. 123-130。
――――　1996b「サンタクロースとトナカイ遊牧民―ラップランド観光と民族文化著作権運動」『観光人類学』（山下晋司編）pp. 113-122。
グリーンウッド, D. J.　1991［1977］「切り売りの文化―文化の商品化としての観光活動の人類学的展望」『観光・リゾート開発の人類学―ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応』（バーレーン・L・スミス編）pp. 235-256、勁草書房。
グレーバーン, N. H.　1991［1977］「観光活動―聖なる旅行」『観光・リゾート開発の人類学―ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応』（バーレーン・L・スミス編）pp. 27-49、勁草書房。
スミス, V. L. 編　1991［1977］『観光・リゾート開発の人類学』（三谷浩史監訳）勁草書房。
曽士才　2001「中国における民族観光の創出―貴州省の事例から」『民族学研究』66(1):87-104.
坪井洋文　1986「故郷の精神誌」『現代と民俗―伝統の変容と再生』（谷川健一他編、日本民俗

学大系第12巻）pp. 267-308、小学館。
橋本和也　1996「フィジーにおける民族文化の演出―新たな『観光文化』の可能性を求めて」『観光人類学』（山下晋司編）pp. 160-168.
――――　1999『観光人類学の戦略―文化の売り方・売られ方』世界思想社。
――――　2001「観光研究の再考と展望―フィジーの観光開発の現場から」『民族学研究』66(1)：51-66.
橋本裕之　1996「保存と観光のはざまで―民俗芸能の現在」『観光人類学』（山下晋司編）pp. 178-188.
ハンドラー, R.+リネキン, J.　1996［1984］「本物の伝統、偽物の伝統」『民俗学の政治性』（岩竹美加子訳）pp. 125-156、未来社。
ブーアスティン, D. J.　1964［1962］『幻影の時代―マスコミが製造する事実』（星野郁美・後藤和彦訳）東京創元社。
ベンヤミン, W.　1990［1936］「複製技術時代における芸術作品」（高木久雄・高原宏平訳）『複製技術時代の芸術』pp. 7-59.
本田安次　1966「椎葉大河内の神楽　宮崎県東臼杵郡椎葉村大河内」『神楽』木耳社。
メルッチ, A.　1997［1989］『現在に生きる遊牧民―新しい公共空間の創出に向けて』（山之内靖他訳）岩波書店。
森田真也　1997「観光と『伝統文化』の意識化―沖縄県竹富島の事例から」『日本民俗学』209：33-65.
八木康幸　1998「祭りと踊りの地域文化―地方博覧会とフォークロリズム」『民俗の思想』（宮田登編、現代民俗学の視点3）pp. 122-145、朝倉書店。
安井眞奈美　1997「町づくり・村おこしとふるさと物語」『祭りとイベント』（小松和彦編）pp. 201-226、小学館。
山下晋司　1996a「観光人類学案内―≪文化≫への新しいアプローチ」『観光人類学』（山下晋司編）pp. 4-13.
――――　1996b「観光の時間、観光の空間―新しい地球の認識」『時間と空間の社会学』（井上俊他編、岩波講座現代社会学6）pp. 99-115.
――――　1996c「序　南へ！北へ！―移動の民族誌」『移動の民族誌』（青木保他編、岩波講座文化人類学7）pp. 1-28.
――――　1998「書評　太田好信著『トランスポジションの思想』」『民族学研究』63(1)：121-125.
――――　1999『バリ　観光人類学のレッスン』東京大学出版会。
吉見俊哉　1992『博覧会の政治学―まなざしの近代』中公新書。
――――　1996「観光の誕生―擬似イベント論を超えて」『観光人類学』（山下晋司編）pp. 24-34.
渡辺伸夫　1981-1993「椎葉神楽発掘」椎葉村総務課編『広報しいば』椎葉村。

Cohen, E. 1988 Authenticity and Commoditization in Tourism. *Annals of Tourism Research* 15:371-386.

Ivy, M. 1995 *Discourses of the Vanishing: Modernity, Phantasm, Japan.* Chicago : The University of Chicago Press.

Kelly, W.W. 1986 Rationalization and Nostalgia: Cultural Dynamics of New Middle-Class Japan. *American Ethnologist* 13(4):603-618.

———— 1991 Directions in the Anthropology of Contemporary Japan. *Annual Reviews of Anthropology* 20:395-431.

MacCanell, D. 1976 *The Tourist: A New Theory of the Lisure Class.* New York: Schocken Books.

Martinez, D.P. 1990 Tourism and the Ama: the Search for a Real Japan. In *Unwrapping Japan.* Eyal Ben-Ari, Brian Moeran and James Valeentine (eds.), pp.97-116. Honolulu: University of Hawaii Press.